

史と近代日本の人文社会科学を同時に再考しようというわけだ。

この学派に関連する資料として京都大学人文科学研究所の所蔵資料を取り上げたい。同研究所(一九四九設立)は、東方文化学院京都研究所(一九二九設立)、独逸文化研究所(一九三三設立)、(旧)人文科学研究所(一九三九設立)という目的も設置者も異なる三つの機関が「世界文化の総合的研究」という理念の下に統合されたものである。これらがそれぞれ「東方部」「西洋部」「日本部」に継承され、さらに二〇〇〇年、「西洋部」「日本部」が「人文部」に統合され、現在に至っている。

近年、所蔵されていた非現用文書の残存状況を確認すると、その顕著な不均衡が明らかとなった。東方部、西洋部、日本部の関連文書残存量が単純な三分とはならず、およそ八対一対一という割合となったのだ。要因はいくつか考えられるが、後継団体の「歴史意識」が大きく作用していると推測される。すなわち、研究所の伝統をことさらに尊重する「冷たい社会」東方部と、それをかたくなに捨て去ろうとする「熱い社会」人文部という対比が可能となる。そして皮肉なのは、「冷たい社会」東方部のほうが、資料の蓄積に基づいた「発展史」を有するのに対し、「熱い社会」人文部のほうが、資料の欠如のため「発展史」を持ち得ないという逆説的状况に帰結していることだ。

このことは「資料」を考えるに際して、一つの糸口を与えるだろう。一般に過去の情報は、記号に書き記されるか、モノの形を保つか、カラダに刻み込まれるか、そのいずれかでしか伝わらないが、この三者は思いのほか補完的だ。というのも、記号情報は何らかの物理的媒体を要求し、かつそれは「保持者」

を要求するからだ。そしてその保持者の「歴史意識」が存在状況を規定するということは、逆にいえば、資料の存在状況それ自体が、対象となる「出来事的一端」だということにもなる。付け加えれば、そのような存在状況に介入しそれを「資料」化するのとは、結局のところ、研究主体の問題意識と探索能力である。まとめると、ヒトとモノと記号の相互補完的状况に研究主体が介入する場所に「資料」は発生する。こうした認識の下に、近代宗教研究の新たな領野が切り開かれるはずだ。

正徳寺資料から見える戦前の仏教国際化

吉永 進一

近代仏教史研究に新しい波があるとすれば、ひとつは理論的な方向での変化である。他の宗教研究の諸領域での成果を踏まえて、従来、研究の規範となってきた吉田久一、柏原祐泉、池田英俊らの枠組みを、どう拡張し、どう継承していくかという問題がある。もう一方に、これと通底して、一次資料の見直しがある。これはさらに二つの方向があり、最近発表された精神主義の著者をめぐる研究が端的に示すように、近代仏教史の有名な人物についても実はまだ研究は十分ではない。もう一方は、今まで埋もれてきた事件に光が当たり、文脈づけられ、歴史的な意味が与えられる場合である。たとえば、明治二二年のオルコットの来日が、アジア全体の仏教復興における神智学の意義、あるいは欧米における仏教受容での神智学の役割といったパースペクティブから、ようやく歴史的イベントとして記述されるようになったのは比較的最近のことであり、ないものとされて

きた事件が、見えるようになってきたのも新しい動きである。

近代仏教の場合、まず定期刊行物まで遡ってみるだけでも、歴史のパスpekティブはかなり異なってくる。ある事柄の文脈や布置を把握するためには、必要な記事をピンポイントで読むだけではなく、その事柄から面的に、さらには他の雑誌を含めて、横断的に雑誌を読んでもいくのが理想である。そうであれば、すべての雑誌を読むことは不可能である以上、信頼に足る記事目録が不可欠になってくる。しかし、明治の仏教雑誌研究はあまり進んでいなかったのが実情である。今後、雑誌の読み込みが進めば、事件や人物の見え方も変わってくるだろう。個人の書簡や日記などの研究もまだまだ進んでいないが、求道会館の近角常観資料研究のように優れた成果もあがっている。本発表で扱う正徳寺の宇津木二秀(一八九三—一九五一)の資料も、そうした活字化される前の手稿、書簡、名刺、写真などのさまざまなモノからなっている。本発表では、実際の調査の手順に触れながら、モノの発見と意味の発見という二重の意味での発見の具体的な過程を報告したい。

宇津木二秀は、ロサンゼルスの開教師であり、龍谷大学などで英文の教員を務めた人物である。Adele Algeo の論文 Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan のビアトリス鈴木が運営していた神智学、大乘ロッジの中心人物として名前があがっており、仏教書の英訳はあるが、著作も少ないために、その名前はまったく知られていない。しかし彼が住職をしていた正徳寺には、その国際的な人脈を示す書簡、名刺、写真などが多数眠っていた。

貴重な資料のひとつは、Mahayanist と題する雑誌と、Mahayana Association の名簿である。一九一五年に結成され、雑誌は翌年には終刊になっている。宇津木が運営に協力したこの協会の中心人物は、浄土真宗で得度したW・マクガバンと臨済宗で得度したM・T・カービーである。欧米人の大乘仏教での帰依と修行ということでは、最も早い例になる。短命には終わったが、大乘仏教の欧米への流布という点からすれば、かなり重要な団体である。参加者の点からすると、大乘協会の後継とも言えるものが大乘ロッジであり、書簡からはビアトリスが信頼している様子がうかがえる。写真からも、宇津木の人脈がいかに広い範囲に及んでいたかが分る。

正徳寺資料の発見と解説は、学知の相対化を含む仏教史のパスpekティブの変化、インターネットを介した情報交換、若手研究者の出現、デジタル技術による資料の伝達や保存の容易化など、理由はあげられるが、近代仏教では資料がいまだ豊富に残っているというのが最大の理由である。逆に言えば、代が交替すると消滅する危険性は大きいということであり、そこに資料調査を急ぐ理由がある。

パネルの主旨とまとめ

大谷 栄一

吉永、岡田、谷川、大谷は、共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(科研費・基盤研究(B)、代表者…大谷、二〇一—一四年度)に取り組んでおり、本パネルはその中間報告である。今回は、調査・研究の対象となる資料の探